一、南京への道

日本人の行為を理解しようとするときに、ある非常に単純な疑問が真っ先に頭に浮かんでくる。人間の行動を律する制約を、あれほどまで完全に逸脱した日本軍の兵士の振る舞いが放置されたのは、いかなるものの崩壊の結果なのだろうか？　なぜ、日本軍の士官はそのような崩壊を認め、あるいは奨励したのだろうか？　日本の政府は事件にどのように関わっていたのだろう？　最低限、政府は、事件について、自らの情報筋から知りえた報告、さらに海外の報道などから得られたものに対してどのように対応したのだろうか？

これらの疑問に答えるためには、日本の歴史を簡単に概観しなければならない。

二〇世紀の日本人のアイデンティティーは、軍事的な抗争によって確立維持されてきた千年来の制度によって造り上げられていた。古代のこの島では、強力な豪族たちが絶え間ない相互間の戦闘を担う私的な軍隊を雇っていた。中世には、これらの軍隊は日本特有の侍、武士階級に進化した。この武士階級の掟が「武士道」と呼ばれるものだった。主君への奉仕のために死ぬことは、侍、武士が生きているときに成就することができる最高の名誉である。

確かに、このような名誉の規範は日本文化の発明ではない。すでに、ローマの詩人ホラティウスが、青年の支配者に対する責務を定義している。―Dulce et decorum est pro patria mori.（祖国のための死は甘美で正しい）。しかし武士道の哲学は、軍事的な奉仕の定義にふさわしい水準をはるかに超えて肥大化し、それは非常に苛烈なものになり、武士が奉仕の義務を立派に果たせなかった場合には、自ら命を絶つという著しい特徴を持つにいたった。自殺は、最高度に様式化され極度に苦痛に満ちた儀式である切腹によって遂げられる。武士は、立会人の眼前で、ひるまずに自分の腹を引き裂いて死に向かうのである。

一二世紀に、今日では征夷大将軍と呼ばれる、支配的な（かつ最強の）豪族の頭目が、天照大神の直系の子孫として崇拝される天皇に対し、軍事保護の提供と引き換えに、支配階級すべてにおける統治権を認めさせた。この措置は貫徹された。その後、当初は人口のごく一部の割合でしか通用していなかった武士の掟が日本の文化を深く貫き、すべての青年の行動の名誉を律する基準となった。

言葉としての「武士道」が初めて使われたのは一八世紀だが、時間は武士道の倫理の強度を腐食させず、近代においてその極限状態にまで発達していった。第二次世界大戦での有名な神風特別攻撃は、日本の青年が天皇のために自らの命を犠牲にする強い覚悟を西欧人に劇的に印象付けた。日本の飛行士は戦闘機もろともアメリカの艦船に体当たりするよう、儀式的な訓練を受けていた。しかし、降伏よりも死を選ぶという考え方を保持していたのは、一部のエリートたちだけではなかった。連合国軍の部隊が降伏するときには三人の戦死者に対して一人の割合で捕虜になったのに対し、驚くべきことに、日本軍の部隊の場合には一二〇人の戦死でやっと一人が捕虜になったという。

日本の特殊性をもたらしたもうひとつの要因はその孤立性であった。この孤立は、地理的な原因によ

るものでもあり、また自らの政策によってもたらされたものでもある。日本では、一五世紀末から一六世紀初頭（実際には一六世紀末から一七世紀初頭――訳者）にかけて徳川家の支配が確立され、徳川幕府は日本を外国の影響から封鎖する政策を採用した。広い世界からの安全を得ることを目的とした鎖国政策は、ヨーロッパで起こった産業革命の新しい技術から日本の社会を隔絶し、逆に日本を脆弱な安全保障の状態に置くことになった。二五〇年の間、日本の軍事技術は、弓矢、刀剣、火縄銃の水準にとどまり、大きく発展することができなかった。

一九世紀になると、日本の制御能力を超えた事件が鎖国の繭の中の日本に衝撃を与え、日本は不安定で排外的な騒乱に包まれた。一八五二年、貿易港開港を拒否し続ける日本に苛立ったアメリカ合衆国大統領ミラード・フィルモアは、当時、ヨーロッパの拡張主義を合理化するために共通に信奉されていた「白人の責務」を果たすべく、その島国にマシュー・ペリー提督を派遣して、日本の鎖国政策を終わらせようとする決定を下した。ペリーは注意深く日本史を研究し、アメリカの強大な軍事力を誇示することによって、日本を屈服させることにした。一八五三年七月、彼は黒煙を吐き出す軍艦の小艦隊を東京湾に送り、日本の人々に初めて蒸気機関の威力を見せつけた。剣と拳銃で武装した六、七十人の屈強な部下に囲まれたペリーは、将軍の首都に向けて分け入り、日本の高官との会談の開催を要求した。

ペリーの来航を眼にした当時の日本人について、たとえば、彼らが驚愕したと書いたぐらいでは、とてもそのときの状況を言い表すことはできない。歴史家サミュエル・エリオット・モリソンはこの出来事について書いている。「これと同じような状況を言うならば、宇宙飛行士が、地球外の宇宙からの奇怪な宇宙船が地球に向かって進んできていると発表したようなものである」。恐慌状態に陥った徳川幕府

は、戦闘を準備し、貴重なものを隠し、狼狽の中で会合を持った。しかし、結局のところ、アメリカの軍事的な優位性を認め、彼らの任務の要求を受け入れる以外の選択肢はなかった。この一度だけの訪問で、ペリーは徳川幕府に条約を締結させただけでなく、イギリス、ロシア、ドイツおよびフランスというような他の国々に対する日本の貿易の門も開放させたのである。

この誇り高き人々の感じた屈辱感は、激しい恨みとなって残された。一部の指導的なエリートは秘密裡に西欧列強との戦争を主張したが、他のものが戦争は外国をではなく日本を弱めることになると説得した。後者の考え方を採るものは、指導層が侵入者を懐柔し、彼らから学び、静かに報復を計画するべきであると主張した。

> 器械ニ於テハ彼ニ及フヘクモ有サレハ外邦エ通シ操法術策等ヲモ熟練シ四海ヲ家ノ如クニシテ諸外邦ニ往來シ戰功ノ恩賞ニハ外國ノ内ヲ宛行フヘシトセハ兵士キソフテ奮戰ヲ為スト云程ニ至リテ後ニ戰争ノ端ヲ開クモ遅キニ非ス（我々は機械技術では外国に劣るので、外国と交流し、彼らの教練法と戦術を参考にし、周りの海を自分の家のようにして諸外国と往来し、海外に出て、戦闘で活躍したものに外国の土地を与えれば、兵士は競って奮戦するだろう。戦争を宣言するのはそれからでも遅くはない）

このような考え方は広く浸透はしなかったが、この言葉は日本人が従うべき戦略のみならず、個人ではなく国家の成長をにらんだ長期的な視野を述べており、予言的である。

明確な展望を見出せない中で、徳川幕府は情勢を眺め、時期を待つことにした。しかしこれは、彼らの統治の時代の終焉を自身が承認するものだった。幕府のこの融和的な政策は、幕府に忠誠を誓っている支持者に対して幕府が要求してきたものと余りにも食い違っていたので、多数の支持者の心を離反させ、幕府の慎重な姿勢を野蛮な夷狄に対する奴隷的な屈従としか見ない強硬な反対勢力に攻撃材料を与えた。幕府が委託された統治権を遂行する能力を失ったことを確信して、討幕派大名は幕藩体制を覆し、天皇に大権を奉還させるための同盟を結成した。

一八六八年、明治天皇の名の下に討幕運動は勝利し、日本を独立した藩の寄せ集めから、強力な近代国家に造りかえる革命が燃え上がった。彼らは太陽の女神である天照大神を崇拝する神道を国家宗教に格上げし、藩ごとの氏族意識を一掃してこの島国を統一するための象徴として天皇を利用した。西洋に対する最終的な勝利を実現するために、帝国政府は侍の倫理である「武士道」をすべての臣民の道徳に採用した。外国の脅威の危機感がこの島の強いカタルシスとして作用した。歴史上、明治維新と呼ばれるこの時代の日本では「尊皇攘夷」とか、「富国強兵」というような民族主義的なスローガンが叫ばれた。

日本人は驚異的な速度で、科学的にも、経済的にも軍事的にも、近代の時代に突入していった。政府は、最良の学生を海外に送って西欧の大学で科学技術を研究させ、自国の産業の支配権を握って軍事産業の工場を建設し、地方ごとに統制されていた封建的な軍隊を徴兵制に基づく国民軍に置き換えた。また、アメリカ合衆国とヨーロッパ諸国の防衛状況を注意深く分析し、特にその中でドイツの軍事制度に傾倒した。しかし、外国で学んだ留学生が持ち帰った西欧の技術や防衛戦略は、日本の軍事的な優位性の旧来の確信を打ち砕き、将来の西欧との対決における勝利の必然性についての深刻な不安を残した。

日本は、一九世紀末には成果を発動させる準備を終え、アジアの近隣諸国に対して自らの新たな力を試すことにした。一八七六年、明治政府は朝鮮に二隻の砲艦と三隻の輸送艦で構成された海軍艦隊を派遣し、朝鮮政府に通商条約の締結を強要した。これは、ペリーが日本に強要した忘れがたい記憶の転嫁であった。

ついで、日本は朝鮮をめぐって中国と衝突した。一八八五年の条約は朝鮮を中国と日本の共同保護国と規定していたが、一〇年後、日本の超国家主義者が後ろ盾になって発生した朝鮮の暴動を中国が鎮圧しようとしたときに戦争が勃発した。一八九四年九月、宣戦布告からわずか六週間後に、日本は平壌を占領しただけでなく、海戦で中国の北洋艦隊を壊滅させた。清国政府は屈辱的な下関条約に署名することを強いられ、この条約により中国は二億両（テール）の戦争賠償金を支払い、台湾、澎湖諸島、東北地方の遼東半島を割譲し、さらに四つの港市を開放させられた。これは歴史上、第一次中日戦争（日清戦争――訳者）と呼ばれる。

日本にとってこの勝利は、西欧列強があとで横槍を入れて台無しにしなければ完璧なものになるはずだった。戦後、日本が戦争によって獲得した最大の成果である遼東半島は、最終的には、ロシア、フランス、およびドイツの三国干渉によって放棄させられた。ここで繰り返された、遠方のヨーロッパ諸国の政府が日本の行動を牽制するという構図は、西欧の圧迫者に対する軍事的な優位性を獲得しようという日本の決意を強固にするものでしかなかった。一九〇四年までに、日本は軍隊の規模を倍増させ、武器を自国で生産する十分な能力を獲得した。

間もなく、この戦略は報われることになる。日本は戦闘で、中国だけでなくロシアをも打ち負かすこ

とができたのである。一九〇五年の日露戦争で、日本は遼東半島の旅順港を再度占領し、対馬沖での海戦の勝利によって、サハリン島の半分を獲得し、「満州」での商業権益の優位性を認めさせた。これは、西欧諸国の屈辱的な扱いに五〇年間苛立ち続けてきた誇り高き国にとって、陶然たる出来事だった。勝利に浮かれた日本の学者は、日本は「海外に拡張して他国を支配するよう運命づけられている」と宣言したが、これはこの国の心情を要約しているものだった。

主にこの成功のために、二〇世紀初頭は日本にとって幸福な時代だった。近代化によって、この国は、軍事的な威光だけでなく、前代未聞の経済的な繁栄をも得ることができた。第一次世界大戦は、日本の繊維製品や国際貿易の他に、鉄鋼製品に対する巨大な需要をもたらした。株価は高騰し、一夜にして大富豪が生まれ、国中が浪費に眩惑された。伝統的な男権社会の中で奥に閉じ込められていた女性さえもカジノや競馬場で賭博に興じる姿が見られた。

多分、この繁栄が継続していれば、日本に確かな中産階級が形成され、帝国主義的な軍部の影響力をチェックする力を人々が得ることができたのだろう。しかし、そうはならなかった。やがて日本は、近代史におけるもっとも悲惨な経済恐慌に直面することになる。恐慌は、日本がそれまでに獲得したものを吹き飛ばし、日本を飢餓の瀬戸際に追いやり、戦争の道に駆り立てることになった。

一九二〇年代には、日本における繁栄の黄金時代の幕が降りた。第一次世界大戦の終結により軍需物資に対する飽くなき需要が消滅すると、日本の軍需工場は閉鎖され、何千もの労働者が職を失い、路上に放り出された。これに加え、一九二九年のアメリカ合衆国の証券市場崩壊とそれに続く不況によりア

メリカの奢侈品購入が縮小し、そのために日本の絹製品の輸出量が減少した。

重要なのは、日本が第一次世界大戦で連合国側にいたにもかかわらず、戦後の一〇年間、多くの国際的な経済人や消費者が日本製品を遠ざけようとしたことである。ヨーロッパ諸国も日本も、第一次世界大戦の戦果として国外の属領を拡張したが、日本の拡張は同じようには見られなかった。西欧の経済人は、新世紀の最初の一〇年間の日本の中国に対する攻撃的な姿勢に拒否反応を示した。戦後措置の結果として、日本はかつてのドイツ植民地を管理するようになったが、ここで日本が試みた西洋流の植民地主義に対する反応はさらに強烈だった。そのために、これら経済人は中国への投資を加速させるようになった。一方、中国は、山東半島におけるドイツの権益を日本が獲得することを許したベルサイユでの決定に憤激し、日本製品の広範な不買運動を組織した。これらの展開は日本の経済をさらに深く傷つけ、日本が再び国際的な陰謀の犠牲になっているという確信を民衆に広く植えつけることになった。

経済の低迷は日本の地域社会を荒廃させた。会社は倒産し、失業者数が膨れ上がった。困窮した農民や漁民は娘を売春宿に売らなければならなかった。インフレーションの進行、労働争議に加え、一九二三年九月に発生した大震災により、暗い世相は悪化していくばかりだった。

不況の中で、人々の間には、飢餓を避けるために日本は新しい領土を征服しなければならないという議論が広がっていった。明治維新の時期に三千万人ほどだった人口は、一九三〇年代には約六千五百万人に膨張しており、日本にとって、国民に食物を供給することが、次第に困難になっていった。日本の農民は多大な努力を払い、単位面積あたりの収穫高を限界にまで引き上げたが、一九二〇年代には農業生産は頭打ちになった。継続的な人口増大の結果、日本は毎年輸入する食糧に強く依存せざるをえなく

なり、一九一〇年代から一九二〇年代にかけて、日本の米の輸入量は三倍になった。かつては、繊維製品の輸出をもって輸入の支払いに当てていたが、輸出は外国の需要の減少、激しい競争、そしてしばしば課せられた差別的な関税によって制約されていった。

一九二〇年代、日本陸軍の急進的な青年たちは、国家の生存のために軍事的な拡張が絶対条件であると議論するようになった。陸軍少佐橋本欣五郎は彼の書『青年に贈る』の中で次のように書いている。

> さきにわれらは、日本が人口過剰の壓迫より免るゝ途は、三つしかないことを記した。……これを脱れ出る門扉は、海外移民と、商品進出と、領土擴張の三つしかない。しかるに、第一の海外移民といふ門扉は、諸列國の日本移民排斥によつて、ピタツと釘付にされてしまつた。第二の商品進出といふ門扉も、高率関税の障壁と、通商條約の破棄によつて、逆に押しかへされつゝある。
>
> 三つの門扉のうち、二つまで鎖ざされた日本は、どうしたらいゝか。

日本の別の論客は、他国の広大な領土に触れ、それと比較した不公平さに不満を述べ、特にこれらの国々の土地のほとんどの部分で、日本の農民が実現している単位耕地面積当たりの高い収穫率が達成されていないことを指摘した。彼らは中国の広大な土地資源に対してのみならず、西洋諸国のそれに対しても羨望の目を向けた。軍の宣伝担当者であった荒木貞夫は問いかける。なぜ六千万人の口を養う日本は、多くが不毛の地である一四万二、二七〇平方マイルに満足し続け、オーストラリアやカナダといった

国々では六五〇万人の人口に対して三〇〇万平方マイル以上を領有しているのだろうか？　この不均等は不公正だ、というわけである。超国家主義者から見れば、アメリカ合衆国は最大の利益を享受していることになる。荒木は、アメリカ合衆国は三〇〇万平方マイルの本国領のほかに七〇万平方マイルの植民地を保有していると指摘する。

「太平洋に向う領土拡張が十九世紀アメリカの自明の運命だったとすれば、中国は二〇世紀日本の自明の運命なのだ。優れた人格よりなる等質な国民が、社会的に断片化され政府の支配が散漫な空間である中国を、自らの使用と開拓に供しようとすることは、ほとんど必然的である」と。日本の強欲の目標はアジアだけに限定されてはいなかった。日本がアメリカ合衆国、大英帝国、フランスおよびイタリアとの間の主力艦制限協定に参加し、世界第三位の海軍力を保有するという顕著な地位を認められてから、わずか三年後の一九二五年に、国家主義者の大川周明は、アジアを「解放」する日本の運命だけではなく、日本とアメリカ合衆国の間の世界戦争の必然性を主張する書物を著した。その最終章では、二つの強国の運命的な闘争を黙示録的に予言している。このときの彼は、自分自身が自覚していた以上に預言者的である。「東西両強国の生命を賭しての戦が、恐らく従来も然りし如く、新世界出現のための避け難き運命である。この論理は、果然米国の日本に対する挑戦として現れた。亜細亜に於ける最強国は日本であり、欧羅巴を代表する最強国は米国である。この両国は……相戦はねばならぬ運命に在る。日本よ！　一年の後か、十年の後か、又は三十年の後か、そは唯だ天のみ知る」。

新たに獲得した技術的な能力を使用してよりよい社会を建設することを望む人たちと、近隣諸国に対する国家の軍事的な優位性を用いて対外征服のプログラムに乗り出すことを欲する人たちとの間の影響

力強化の競争が進んでいく構図の中で、一九三〇年代の日本の政府は、自らが抜き差しならない泥沼状態に陥っていることに気づいた。拡張主義的なイデオロギーは、私有財産の制限、資産の国有化、そしてアジアの支配を実現するための軍部の独裁を要求する右翼超国家主義者たちの熱烈な支持を得た。このような考え方は、地方出身で若く、東京の政治家に生来の不信感を持ち、権力への即時参加を性急に求める軍部青年将校たちの野望を燃え上がらせた。将校たちは互いに争っていたが、社会を改造し、ヨーロッパに意趣返しをしてアジアを支配するという、彼らが信じている日本の神聖な責務を阻害する官界、財界、政界のすべての障壁を取り除くべきだという、似かよった使命感を共有していた。

干渉主義者たちは政府の穏健派に対して、一歩一歩、譲歩を強要していった。しかし、事態がなかなか進展しないことに失望した彼らは政府の打倒を共謀するようになった。一九三一年に叛乱が計画されたが、この計画は放棄された。一九三二年、東京で海軍将校たちがテロ襲撃事件を起こし、犬養毅首相が暗殺されたが、戒厳令を敷くことはできなかった。

一九三六年二月二六日、青年将校の集団が大胆なクーデターを引き起こし、この事件で何人かの政治家が命を奪われた。反乱軍は東京市街を三日以上も麻痺させたが、最終的には失敗し、首謀者は投獄されあるいは処刑された。政府内で、権力は極論主義者からもっと慎重な派閥に移行したが、重要なのは、この派閥でさえも、アジアにおける日本の支配的な役割に関しては、青年将校の狂信のほとんどを共有していたことである。

やがて、日本の超国家主義者の一部は、中国を支配しようと思うのならば急いで行動しなければなら

ないことに気づいた。一八九五年の日本の要求には屈従を強いられた中国に、民族の自強を目指す兆候が見られたからである。この兆候に、日本の拡張主義者は、自らの使命実現への切迫感を募らせた。

実際に当時の中国は過去二〇年間を費やして、分裂した帝国から戦闘的な国民国家へと、自らを変貌させようとしていた。一九一一年、反乱軍が清帝国の軍隊を打ち負かし、二世紀以上に及んだ満洲族の支配を終わらせた。一九二〇年代には蒋介石が率いる国民革命軍が中国北部の軍閥に対する北伐を成功させ、国家を統一した。彼らはまた、外国の列強が清朝に押し付けた不平等条約の撤廃を最終目的とすると宣告した。蒋の運動が勢いを得ると、日本の満蒙の権益が脅かされることになった。征服の目的である中国が強力になりすぎる前に、急いで、何らかの手を打たなければならなかったのである。

日本政府の承認の下、軍部は中国の情勢に今まで以上に好戦的に干渉し始めた。一九二八年、軍部は「満州」を支配する軍閥の首領張作霖が日本に従順でなくなったときに、その暗殺を企て、実行した。この殺人行為は中国人民をいっそう激怒させ、日本製品の不買運動がさらに強力に組織された。

一九三〇代に、日本は中国に対する宣戦布告のない戦争を発動した。一九三一年九月一八日、日本軍は日本が所有する南満洲鉄道の線路を爆破し、騒ぎを煽り立てようとした。爆発後、急行列車は脱線せずに通過したが、日本人は中国兵を射殺し、世界の通信社に向けて、中国側による破壊工作の筋書きをでっち上げた。日本はこの事件を口実に「満州」を強奪し、満洲国と名前を変え、満洲王朝の継承者で中国最後の皇帝溥儀を傀儡の支配者に就任させた。しかし、「満州」の強奪は中国の反日感情を生み出し、民族主義者の活動家はその感情に訴え、煽り立てた。一九三二年、双方の敵愾心が高まる中で、上海の群集が五人の日本人僧侶を襲撃し、一名が死亡するという流血事件が発生した。直後に、日本は報

復攻撃として市街を爆撃し、何万人もの民間人を殺害した。上海におけるこの大量殺人が全世界からの批判にさらされると、日本は国際社会から自国を隔離することでこれに応じ、一九三三年に国際連盟を脱退した。

中国との避けられない戦争に備えて、日本は数十年間をかけて、男子国民に戦闘訓練をほどこしていた。青年を日本の軍隊に奉仕する型にはめるしつけは、人生の早い時期に始まる。一九三〇年代には、少年期のすべてが軍国主義的な色彩に染められた。玩具店は兵器庫を思わせ、兵士、戦車、鉄兜、軍服、小銃、高射砲、ラッパ、曲射砲などのおもちゃが並べられ、戦争神社のようなありさまになった。当時を知る人の回想によれば、思春期前の少年たちは街路で竹の棒を小銃に見立てて戦争ごっこをし、あるいは、「爆弾三勇士」の英雄談を想像し、背中に丸太を縛り付け自爆攻撃のまねをして遊んだ。

日本の学校の機能はミニチュアの軍事部隊のようなものになった。実際に、教師の一部は軍の将校であり、学生たちに、神聖な使命たるアジアの征服を日本が遂行すること、さらに世界の国々に対し、いずれにも劣らない国民として立派に立ち向かうこと、これらの遂行に貢献する国民の義務を教えた。彼らは、低学年の少年には木製の模型で銃の取り扱い方を教え、高学年の少年には本物の銃で扱い方を教えた。教科書は軍国主義宣伝の道具になった。ある地理の教科書は、日本列島の島の形状までも対外拡張の正当化の言説に結びつけた。「わが国はアジアの最先端にあり、勇敢に太平洋に向かって進んでいるように見える。同時に、アジア大陸を外部からの攻撃から護っているように見える」。また教師たちは、中国本土に対する将来の侵略に心理的に備えるべく、少年たちの心に中国人への憎悪と侮りを植え付け

た。ある歴史家は、一九三〇年代の日本の学校で起きた気弱な少年の逸話を紹介している。彼は蛙を解剖するように言われて動揺し、泣き出してしまった。教師は拳骨で彼の頭を叩き、怒鳴り声を上げた。「お前はなぜこんなちっぽけな蛙のことで泣き出すのだ？　お前が大人になったら、百人二百人のチャンコロを殺さなきゃならないんだぞ」。

（しかし、この心理教育プログラムについての事情は、やや込み入っている。「中国に関して、日本社会には根深いアンビバレンスが存在していた」。オックスフォード大学の歴史学者ラナ・ミッターは指摘する。「朝鮮人に対する場合とは異なり、中国人に対する日本人の感情は種族的蔑視ではなかった。日本人にとって、中国は自らが強く心酔してきた文化の源泉だった。彼らが憤慨していたのは、二〇世紀初頭の中国の混迷、だらしのなさだったのである。一九三一年の満州事変の立役者である石原莞爾は、一九一一年の辛亥革命の熱狂的な支持者だった。辛亥革命の前後の時期には、孫文や袁世凱を含む多数の中国人が日本からの援助や日本による訓練を期待した。また、日本は義和団事件の賠償金を中国のための奨学金や同人会病院の資金として提供したし、『橋本ときお』のような学者は、中国文化を正しく評価していた。日本の外交官や軍人の中国専門家の多くは、中国に対してよく訓練され、博識だった」。しかし、このような博識や洗練が通常の兵士に影響することはほとんどなかった）

日本の学校における軍国主義の根源は、歴史的には明治維新に遡る。一九世紀末に日本の文部大臣は、学校は学生の利益のためではなく、国家の利益のために運営されるのであると述べた。小学校の教師たちは軍隊の新兵のように訓練された。師範学校の学生は兵舎のような宿舎に入り、厳しい規律に縛られ詰め込み教育を受けた。一八九〇年には教育勅語が発布された。これは軍人勅諭と同様の規範を民間人

に適用したもので、権力に対する完全な服従と天皇に対する無条件の忠誠を至上の価値とするものだった。日本の学校では、天皇の肖像と一緒に教育勅語が祀られていて、毎朝、それが取り出され朗読された。勅語の言葉を言い間違えた何人もの教師が、神聖な文書への償いとして自殺したと噂された。

一九三〇年代には、日本の教育システムは組織化され、ロボット工場のようになった。日本の小学校への訪問者は、数千の生徒たちが整然と一列に並び、旗を振りながら行進する光景に驚き、これを賛嘆した。明らかに、その訪問者は訓練と秩序を見たが、それを造り上げ維持するための虐待は見なかったのである。教師たちがサディスティックな鬼軍曹のように振舞うのはありふれたことで、彼らは子どもたちの頬を往復ビンタし、こぶしで殴りつけ、あるいは竹刀や木刀で打ち据えた。生徒たちは重苦しく押さえつけられ、長時間正座させられ、雪の上に裸足で立たされ、グラウンドの周囲を力尽きて倒れるまで走らされた。このような待遇に憤激して来校する人はほとんどいなかったし、生徒の両親でも学校を訪れることはほとんどなかった。

学校の生徒が兵役につくと、権力への服従の圧力はさらに苛烈になった。悪意的ないじめと残酷な上下の順位付けにより、ほとんどの新兵の個人主義的な精神は残らず押し潰されてしまう。服従が最上位の徳目であると執拗に教化され、個人の自尊の感覚は大組織の小さな歯車としての自覚に置き換えられた。このような個人意識から全体価値への昇華を実現するために、下士官や古参兵は、何の理由もなく新兵を殴り、木製の棍棒で手ひどく打ち据えた。入谷敏男によれば、上官はしばしば私的制裁を次のような言説で正当化した。「きさまが憎くて殴るんじゃない。きさまのためを思えばこそ、こんなに手を赤くしてまで殴るんだ。酔狂でこんな真似ができると思うか」。青年の一部は、残酷な環境の中で死亡し、

他の一部は自殺した。しかし、大部分のものは、軍隊という人生の新しい目的を注入する容器にはめ込まれていった。

訓練は、大志を抱く士官に対しても、負けず劣らずに過酷なものだった。一九二〇年代当時、すべての陸軍士官候補生は市ヶ谷の陸軍士官学校を卒業しなければならなかった。定員を超過した兵舎、暖房のない教室、粗末な食事、それは学校というよりも監獄と呼ぶほうがはるかにふさわしいものだった。日本の訓練の猛烈さは、ほとんどの西欧の士官学校を上回るものだった。イギリスでは、士官は一、三七二時間の教室での学習と二四五時間の私的な学習を課せられていたが、日本の標準は三、三八二時間の教室の学習と二、七六五時間の私的学習だった。士官候補生たちは、身体の教練と、歴史、地理、外国語、数学、科学、論理学、製図および書道の教科をこなす厳しい日課に耐えていたのである。このカリキュラムのすべてがあの目的の完成と勝利に向けられていた。何よりも、日本の士官候補生は「敗北を知らない意志」の獲得を求められた。怖しいことに、士官候補生の落第の試験結果は、自殺の危険性を減らすために、すべて秘密にされていた。

学校は、外界から封印された孤島のようだった。日本の士官候補生にはプライバシーもなく、個人としてリーダーシップのスキルを磨く機会もなかった。彼らが読む文献は注意深く検閲され、余暇時間は存在しなかった。歴史と科学は優越民族としての日本人のイメージを創出させるように歪曲された。「人生の多感な時期に、彼らは外界のすべての楽しみ、興味あるいは影響から隔絶されていた」。西欧の記録は語る。「彼らが活動する狭い溝のような空間の雰囲気は、特殊な国家主義、特殊な軍国主義の宣伝が充満していた。我々がすでに心理的に遠ざかっているこの国民は、彼ら自身はるかに我々から遠く離れた

地点にまでいっているのである」。

一九三七年の夏、日本は最終的に中国との全面戦争を引き起こすことに成功した。その年の七月、条約によって中国の都市天津に駐留していた日本軍の連隊が、古跡盧溝橋付近で夜間演習を行った。休息中に何発かの銃弾が暗闇から日本軍に向けて発砲され、一人の日本兵が直後の点呼に応じず、行方を確認できなかった。この出来事を地域に対する軍事力行使の口実にして、日本軍の部隊は盧溝橋に近い宛平県城に進み、門を開けて入城させ兵士を捜索させるよう要求した。中国の指揮官が拒絶すると、日本軍は砲撃した。

七月末までに、日本は天津北京地区全域を確保し、八月には上海を侵略した。このようにして、第二次中日戦争は引き返せない段階に踏み込んでいった。

しかし、中国の征服は日本が予測していたよりも難しいことが明らかになった。上海の中国軍だけでも兵士の人数は日本海軍の一〇倍に達していたし、国民政府の指導者蔣介石は彼の最精鋭部隊を温存していた。その年の八月、三万五千人の増援部隊が上海の埠頭に上陸しているときに、日本軍は初めての敗北を経験した。隠れていた中国の砲兵部隊陣地からの砲撃が始まると、数百人が戦死し、戦死者の中には皇后良子のいとこも含まれていた。数ヶ月の間、中国軍は並外れた勇気をもって都市を防衛した。上海の戦闘は、街路ごとに、バリケードごとにひとつずつ、ゆっくりと進行し、日本人をいらだたせ、悔しがらせた。

一九三〇年代、日本軍の指導者は、日本は中国大陸を三ヶ月で征服できると吹聴していて、その言葉は一般にも真面目に信じられていた。しかし、上海市の戦闘だけで夏から秋まで引き摺られ、秋から冬

まで引き摺られたとき、日本がたやすく勝利することができるという幻想は打ち砕かれた。そのとき、軍事技術も知らず、訓練されていない素朴な人々が、優勢な日本軍への抗戦を担い、日本軍を立ち往生させていたのである。一一月に上海が陥落したとき、皇軍の軍紀は極度に悪化し、南京に向けて進軍する多数の兵士が復讐の念に駆られていたと言われる。